

## 陳 述 書

2015年 9月14日  
福井県小浜市山手2丁目1-18  
松本 浩

松本浩と申します。1939年7月14日生れの76歳です。大飯原発から10キロ圏内の、人口3万2000人ほどの福井県小浜市に居住しています。

1962年の4月、私は敦賀半島の西海岸中ほどの町、美浜町の菅浜小学校に新任教師として赴任致しました。

その翌年の春頃、近くの丹生集落に原子力発電所が誘致される話題が広がり始め、夏休みの夜、菅浜漁業協同組合の青年部長が校庭片隅の教員宿舎に私を訪ねて来ました。

「先生、原発ってどんなもんや」「いや、分からん」「いっぺん調べてくれや」というやり取りがあって、私は、休みを利用して原発について調査し、結果をガリ版刷りの冊子にまとめたものを20部ほど学習会用として青年部長に渡しました。

原発の構造や原理、イギリスの牛乳を汚染した事故の例、使用済み核燃料の毒が人の始末に負えないことなどを書いた私のつたない印刷物は、ある日青年部長らの手で菅浜漁業協同組合総会の会場に配られました。

その翌日、小学校の狭い職員室は町や村の名士が集まって異様な雰囲気包まれ、私を廻って激しい議論がありました。年度末の新聞報道で私は、4月に新設される病弱児養護学校に転勤になったことを知りました。

開校といっても校舎などはなく、福井県や近隣の府県から肺結核や心臓病などで親元を離れて入院中の、幼児から中学生までの子供たち数十人が大部屋で闘病生活を送っている、旧陸軍病院の結核療養施設でした。

私たちの仕事は、近隣の小学校の物置からまだ使えそうな椅子と机を分けて頂き、病室を教室にしつらえることから始まりました。

さて、元の学校、菅浜小学校の教頭先生は、隣村のお寺の住職で酒と議論が大好きな人でした。宿直当番の夜などは、いつも私を呼んで議論を仕掛けてきたものでした。政治のこと、教育実践のこと、社会主義の理想と現実、騒ぎとなった原発のことなど、議論はよく深夜に及んだものでした。

ある時、原発を動かした後に残る使用済み核燃料の処理について、人間の手に負えないものを将来の世代に先送りする無責任さについて私が話しますと、教頭先生は次のように言って私の話を遮りました。

「君ね、人類は誕生以来300万年、さまざまな困難に遭遇して来た。しかし、人類の英知は、次々とその困難を解決して見事に今日の文明を築き上げて来た。原発の使用済み核燃料の処理だって今後50年もすれば、人類の英知が必ず解決するよ。何も君が心配する必要はない」と。関電は校長会や教頭会、業者の集まりなどで同様の言い訳を流していたのですが、当時の私には反論のしようがなく、「そんなものか」と妙に教頭先生に納得させられてしまったものでした。

それから、やがて50年を迎えようとしていた2012年5月、大飯原発3、4号機の再稼働をめぐって開かれた小浜市民への説明会で私は、50年前の出来事を話して使用済み核燃料の処分、保管に何の解決の目処もないまま死の灰を生成し続け、それを平気で子孫に丸投げすることの罪深さと無責任さを糾しました。

「あれから50年経とうとしていますが、人類の英知は使用済み核燃料の問題を解決しましたか」と尋ねたところ、経済産業省の役人は「ただ今、プルトニウム239など

の半減期の圧縮を研究中であり、高レベル放射性廃棄物の処分については地下埋設の場所と埋設の方法を探っているところです」という回答で、50年前の菅浜小学校の教頭先生と同じレベルの回答に過ぎませんでした。

2009年5月に、私は、旧日本軍が遺棄した毒ガス弾で被毒した少年「周くん・劉くんを応援する会」のお誘いを受けて中国東北部（旧満州）を訪ねました。

吉林省敦化市の小学校に通っていた周くん・劉くんという二人の少年は、2004年7月、山村の両親の実家で楽しい夏休みを過ごしていました。

ある日、近くの松林を流れる小川で水浴びをしていた二人は、岸の土手の中から頭を出している砲弾らしきものを見つけて掘り出し、旧日本軍が遺棄した毒ガス弾の腐爛性猛毒イペリットの飛沫を浴びてしまいました。

旧日本軍はソ連軍の侵入に際して、触れれば必ず悲劇をもたらす国際法違反の大量の毒ガス弾を「満州」の各地に遺棄して逃走しました。地中に埋められたり川に投げ込まれたりして遺棄された毒ガス弾の数は40万発ともいわれています。

60数年間、地中で眠っていた毒ガス弾は、その毒性を保ったまま21世紀の少年たちを襲いました。後遺症で見るからに弱々しい二人の少年の案内で訪れた松林には、無数の小旗が立てられていました。白い小旗は安全処理が終了したもので、赤い小旗は未処理で危険な状態にあるものを示していました。

未舗装の道路から100メートルほどの距離を隔てた小川まで、小旗の間を縫うようにして一行を案内した少年たちは、毒ガス弾を見つけた小川のほとりに立って当時の様子を語りました。

私は、少年たちの話を聞きながら、原発の使用済み核燃料が幾世代か後のある日、突然、罪のない子供たちに放射能を浴びせかける悲劇を思い、暗然たる思いでした。

その日のつたない私の短歌の中から2首、詠ませて頂きます。

- ・ 国策のすゑは危ふし「満州」の大地に立ちてふるさとを思ふ
- ・ 核のごみ抱く若狭よかなしかる無告のなみだ幾代ながさむ

私が住む小浜市は若狭湾の中ほど、敦賀市と高浜町を結ぶ50kmのちょうど中間のあたりに位置し、「海のある京都」などとよばれるほど古いお寺の散在する町ですが、原発の建設については1970年以降これまで度も誘致を拒否しています。

私は、原発誘致勢力と原発反対運動勢力の間に存在したのは、明らかに人間としてのモラルの違いであったと考えています。

10数年前、使用済み核燃料の貯蔵施設を小浜市に誘致しようとする動きと、これを阻止しようとする運動が激しく衝突したときのある集会で、誘致派の市民の一人が立ち上がって言いました。

「反対派の皆さんは、さかんに50年後100年後の災いを心配しておられますが、大事なことは現在ただ今私たちのことではないでしょうか。町は不況で寂れ、商店街のシャッターは下ろされ人通りも途絶えています。もし、使用済み核燃料の貯蔵施設を小浜市に誘致したならば、どれほど街が賑わい活気に満ちることでしょう。50年後のことは、50年後の人々に委ねてはどうでしょうか」と。

この発言者は人々の激しい批判を浴びて面を上げられないほどでした。

また、福井県敦賀市の高木孝一市長は、原発誘致を巡って揺れる石川県志賀町の講演会に出かけて行って言いました。「50年後に白血病の子供が生まれるやら100年後に生まれる子供がみんな片輪やら知りませんが、原発は金になります。今はおやりにな

った方がよい」と。志賀町の原発誘致派の人々は万雷の拍手でこの演説に応えていましたが、私は深夜、布団を被ってこの録音テープを文章におこしながら体が震えました。小浜市民はこのような考え方に「NO」の意志を表明したのです。

使用済み核燃料について福井県の栗田幸雄前知事や西川一誠知事は、「痛みを分かち合う意味で、中間貯蔵施設は電力の恩恵を受けた消費地に保管してもらおうのがよい」と言っています。

しかし、原発が危険な使用済み核燃料を発生させると知りながら誘致し、後始末は他所の町や後の世代に押し付ける、これほど無責任で恥知らずなことはありません。

小浜市民が小浜市への使用済み核燃料の貯蔵施設の誘致を阻止したときの集会で「使用済み核燃料貯蔵施設の小浜への誘致を阻止したことはよかった。しかし、他所なら建設してもいいのか」と一人の市民が言いました。

青森県なら「核の墓場」にしてもいいのか。「経済援助」と引き換えにモンゴルの荒野になら埋めてもいいのか。大電力消費地の大阪や神戸なら押し付けてもいいのか・・・この問いかけは、私たちに投げかけられたまま消えることはありません。

若狭湾の原発がその敷地内に抱える使用済み核燃料は3550トン、そこに含まれる死の灰は広島型原子爆弾の27万3000発分に相当するものです。

猛毒プルトニウムの半減期は2万4000年、その毒性が半分になるのに2万4000年かかり、半分になったその毒性がまた半分になるのに更に2万4000年と際限なく続くのです。人類の文明が誕生してからでも高々5000年であることを思うと、気の遠くなるような歳月と言えます。

もし、大飯原発3、4号機が事故もなく1年間動いたとすると、2基の炉の中にたまる死の灰は広島型原子爆弾の2000発分、生成されるプルトニウムは長崎型原子爆弾60発分と聞きます。

その処分や安全な保管の方法を知らないまま、この膨大な量の死の灰やプルトニウムを私たちは子孫に残して行くのです。

はるかな未来の彼方から、「あなたたちは、まだ核のゴミを増やすのですか」と、問いかける悲しげな声が聞こえてくるように思われます。

どうぞ、原発の再稼働を認めないでください。

ありがとうございました。